

しかし、いつまでこの生活が続くのか、一日延びる毎に体力が落ちる。風呂へも入れない。日本へ帰りたいが、いつのことやら、心身共に極限まで来た。新聞、ラジオがないのでいろいろとデマが飛ぶ。北緯三十八度に線が引かれてそこを突破しないと帰れないことがわかってきた。

そこへ入った朗報、奥地から日本人が移動をはじめ、定州駅から南下しているとのこと、私共が奥地の人達に混ざって、こっそり脱出することにきまつたという。

この収容所から五十人ずつ夜陰にまぎれて出発という。順番は子供の多い人と、単身者、第一陣が出た後は毎日毎日廊下に立ち、自分が呼ばれるのを待った。

くしくも新京を発つて丸一年、二十一年八月十日、老若を問わず一人一升五合のお米をもらい、唯一の財産ある娘の手を引いて、飯盒、ミルクパン、当時の全財産、(お金は無銭)を持ち、リーダーの男性に導かれて収容所を出発、駅まで真つ暗な道を一言も話さず黙々と歩いた。途中保安官に呼びとめられ「タレカ、セキニンシヤ、タレカ」の声に怯えながら、帰れる嬉し

さと、今ここで引き戻されたらの不安を胸に電灯一つない真の闇を全員無事、駅までたどり着いた。

## 終戦から故郷の土を踏むまで

兵庫県 樋口 匡

昭和二十年八月十五日、私は各女学校に軍衣袴の縫製指導員として巡回、母校の神明高女で臨時ニュースを聞き、目先真暗、大きな衝撃を受けて帰隊、私物整理、除隊準備等で皆隊内を走りまわった。

私の家は隊に近いのでソ連にすべてを引渡すために、残務整理、隊員の食事の世話を頼まれ、一週間目に、明日十時にソ連兵が来隊するから朝食まで帰宅するように言われ、隊員と最後の別離となった。

高齢の両親と女学校を卒業したばかりの妹、昨日まで米一升が何円かも知らずに暮してきた私は父に代り、大黒柱の役目を果たさねばならぬ立場になった。

新京の長兄、次兄家族とは音信不通、日本の土を踏

むまででは頑張らねばと、たけのこ生活、(物を売り食いして、一つ／＼なくなつて行く生活) デパートの陳列ケースを借り、異国人相手の商売、衣類、置物など売れる品は次々と売り食い、家には二十年九月から兵隊三人が入居し、町はソ連、中国人が多く、日一日と日本人はすくなくなり、家の前を通る市電は運転手も客も中国人ばかり。

二十一年三月にソ連将校が二階に入居、私達四人は階下一室八畳間で生活、他の部屋に、二十一年九月、撫順から引揚船に乗る日まで老母、嫁、幼児二人の四大家族、二十年は、一日五百円、二十一年は一日千円の生活費が必要、同居者に少しずつ食品のおすそわけをし、帰国できる日までがんばりましょうと励まし、両親の健康を気づかいながら、引揚命令の通知が一日も早いことを祈念し、兄達に元気な姿で会える日を待ち続けるのみでした。

二十一年十二月、ソ連将校が出て二日後、八路軍が入居、廊下、階段、畳などは昔の姿が見る影もなく荒され、わが家とは思われぬほど変りました。

窓から外をみると、大八車に手足をしばられた日本人男性の姿を見ても助けられず、今も目に焼きついています。日本人幼児を連れて歩く中国人に数多く会い、幼児は私の姿を見て、母親を探しているような顔つき、あどけない面影が忘れられない。

今も胸が痛む思い。二十二年迎春、町内の人も残り少なく、治安は日増しに悪く、外出もままならない生活で、帰国を希望しなかった父は二人の娘のことを思つてか、賛成するようになった。

日露戦争直後官吏として渡満、築きあげた家、土地等すべての財産、宝物を失う胸中は断腸の思いだったでしょう。私たちも生れ故郷で、住みなれた大連を離れる淋しさは父と同様で筆舌につくし難い思いでした。

兄達に会える一途の望みを胸に親子四人で帰国を決定した。三月中旬、引揚通知があり、知人に連絡、荷物を運んでいただき、四人で長年住みなれた家を後に、南山麓小学校に集合、ソ連兵が閉門、聞くと日本人帰国者は終りとのこと。

大連港から最終船の引揚者と知りました。翌朝、両親はトラックの荷物の中にかくれ、大連港まで、私は団旗を持ち、妹と大連港まで徒歩、風雪強く、港から吹きあがる潮風、岸壁にソ連兵が炊きたての白米を四斗樽に入れ、二個ずつ団毎に三十分であき樽にしる、早く早くとわめいている。

おばさん十人に出でいただき、岸壁で風雪にさらされながらおむすびづくりを部隊生活で経験したやり方で、手順よく二十分で完了。

監視していたソ連兵は、早業にびっくり、倉庫に走ったソ連兵は、前団が時間切れで残した四斗樽に半分以上あるご飯を、これやると言つて渡された。

興安丸の船底生活、臨時の便所は甲板にあり、階段が急なため、老人、子供は無理で、バケツ一個を提出、私が甲板まで捨てに行くようにしました。

博多の町の灯を目前にしながら、前に船からコレラ患者が出たために、船内消毒四日間停泊し、やっと四月一日上陸、故郷大阪に向かった。

次兄は両親の元気な姿に会い、眼鏡の奥にキラリと

光るものをみた。そしてどちらかが箱に入つて帰ってくるのじゃないかと言つた。

よく生きて帰つてきてくれたと言われ、お互いに再会できたことを喜び、私は肩の重荷が一度に軽くなつた。

## 敗戦国民の苦痛 「脱走三千里」

兵庫県 神吉 一夫

ソ満国境の虎林、牡丹江と流転した敗残兵十五人は、ついに武装解除されて捕虜収容所入りとなり、「戦闘部隊」だからとして食事も与えられず、広場で寝起きするだけで、ただ死を待つか、シベリアに送られて死ぬか、どちらにしても「死ぬ」ことであると、ひしひしと感じられた。携帯食糧も底をつき始めたとき、ソ連領タイシエツト行きが開始された。脱出を決行し、生死を共にした戦友は、二回の決行で、十人の尊い生命を消してしまつていた。